

けでも、戦争によつて寸断された交友関係を再び繋ぎ合せて、新しい協同體を造り上げる基礎となりうる事は、確實である。

かうして是迄ばらばらになつてゐた人人が新しく繋ぎ合はされ、

互に互を認識し、改めて手を握り合ひ、自分達の使命の自覺の下に藝術的な雰圍氣を造り上げ、更に日本再建の行進を初める事が出来る」とすれば『同聲會報』の再誕は同時に同聲會の再誕となり、ひいては日本の音楽文化の再誕ともなる事が出来るであらう。また事實さうなる事を、私は切望して已まない者である。(二三・二・一)

〔同聲會報〕第二六六号 昭和二十三年四月 一頁

小宮名譽會長の辭職

小宮本會名譽會長は就任以來會員のだから敬慕されて來たが今回邦樂科問題に關し信念を曲げたくないという點で學校長の任務に對し辭表を提出せられ六月十八日付依願退職となつた爲名譽會長をも辭される形となつたので改めて顧問をお願いした。

〔同聲會報〕第二六九号 昭和二十四年十月 六頁

二 外国人教師

(一) ハインリッヒ・ヴェルクマイスター Heinrich Werkmeister

在職期間 明治四十年〜大正十年(一九〇八〜一九二二)、昭和六年〜十一年(一九三二〜三六)

外国人講師
担当科目 チェロ・コントラバス・ピアノ・和声学

履歴(要約)

一八八三年三月三十一日ドイツのバルメン市に生まれる。

幼少より父に就いて音楽を学び、バルメンギムナジウムを経てベルリン王立高等音楽学校に入学。五年間の在学中、チェロをロベルト・ハウスマン Robert Hausmann に、室内樂をヨゼフ・ヨアヒム Joseph Joachim に師事。卒業後はベルリン音楽院で教鞭をとるかたわら、ドイツ各都市主催の音楽会に招かれてチェロ奏者として活躍、数多くのオーケストラとも共演した。

一九〇七年(明治四十年)十二月六日付で東京音楽学校に講師囑託として赴任。チェロ、コントラバス、ピアノの授業を受け持つ。東京音楽学校における初めてのチェロの専門教師。

一九〇九年(明治四十二年)十月十四日奏任官に準ぜられる。

一九一一年(明治四十四年)六月十四日奏任官五等以上に準ぜられる。

一九二一年(大正十年)十月二十六日勅任に準ぜられる。十二月三十一日付で退任し、帰国。

一九二三年(大正十二年)再来日。以後東京高等音楽院(現国立音楽大学)昭和二年四月〜昭和十一年三月、東洋音楽学校(現東京音楽大学)などで教鞭をとる。

一九三一年(昭和六年)四月二十七日、東京音楽学校教務囑託。

一九三五年(昭和十年)七月、ドイツ政府より「プロフェッサー」の称号を受ける。

一九三六年(昭和十一年)三月三十一日病氣を理由に辞任。七月二十五日勲五等に叙せられ雙光旭日章を授与される。八月十六日肝臓硬変症のため渋谷区美竹町の自宅で死去。ヴェルクマイスターの日本滞在は、一時帰国をはさみ約三十年の長きにわたつた。その間、日本の室内樂や管弦樂の發展に大きく貢献するだけでなく、作曲家としても活躍した。ま

た、門下生はチェロはもとより楽壇全分野に及び、山田耕筰、信時潔、近衛秀麿、梁田貞、小松耕輔、鈴木信子、柳兼子、松島舞ら多数の作曲家、演奏家を輩出した。

セロのウエルクさんにドイツ政府から博士號

在留廿八年、わが樂壇の恩人

東京音樂學校、國立音樂學校教授ウエルクマイスター氏の許へ最近ドイツ政府から、ヒトラー總統、フリック文相の署名入りで『プロフェツサー』の稱號を贈る旨通達があり、同氏を非常に喜ばせてゐる、この『プロフェツサー』は日本の博士號と同じく終身の名譽あるもの、駐日ドイツ人でこの稱號を持つてゐるのは今は引退してゐる元音樂學校教授ウンカー氏だけである

ウエルクマイスター氏は明治四十年來朝、日本に初めてセロの奏法と作曲學を紹介し以來二十八年在留して音樂教育に當つてゐる我が樂壇の恩人、今度『プロフェツサー』を贈られたのも日獨文化親善に盡すところが多いとドイツ政府に認められたものである

ウエルクマイスター氏は二十九日澁谷區美竹町の自宅で
なか／＼珍らしい、私でも驚いた、初めは三年の約束で日本に來たのだが、日本が好きで、もう二十八年になる、この頃日本の人がセロを勉強する人が少くなり残念で堪らない、皆トーキーや蓄音器に追はれて生活が出来ないからであるが、本當の藝術のため
残念だ

と語つてゐた

〔東京朝日新聞〕昭和十年七月三十日

〔東京音樂學校長から文部大臣宛の叙勲内申案〕

音庶第四七號 大正十年十一月廿二日起案 決定 廿八日決行

叙勲内申案

本校外國人講師ハインリッヒ・ウエルクマイスターハ本校デ明治四十年十二月六日ウイオロンセロ、バス及ピアノノ授業ヲ囑託シテ以來今日マデ十四箇年ノ間教授致シマシタガ其成績甚タ良好デ且又音樂ノ普及向上ニ盡力シタ功績顯著デアリマス今般都合ニ依リ本年十二月三十一日限り囑託ヲ解キマスカラ勲四等ニ叙シ旭日章ヲ授與セラレマス様上奏相成度内申致シマス

年月日

校長

文部大臣宛

〔手書き〕

〔叙位叙勲上申原議 明治三十三年〜昭和二十一年 人事係〕

〔叙勲を報ずる新聞記事〕

音樂界に盡した勞苦實を結ぶ

セロのウエルクマイスター氏勲五等を授けらる

本邦セロ音樂開拓の第一人者たる獨逸人ハインリッヒ・ウエルクマイスター氏は功績により本月廿五日附をもつて勲五等の恩命に浴した、同氏は明治四十年十二月來朝して直ちに東京音樂學校外國人講師に就任して勤續滿十四年に及び累進身分取扱を勅任に準ぜられたが、大正十年十二月一應退任して東京高等音樂學院に聘せられた、しかるに昭和六年四月再び東京音樂學校に就任し、本年三月病氣の故をもつて辭任するまで前後實に三十年の久しきに亙り本邦音

樂教育のため貢獻し、就中セロの教授に於て功績を挙げ幾多の高足を養成し、夙に作曲に關する教授に盡瘁して優秀なる本邦人作曲家の輩出の端緒を開き、又東京音樂學校管絃樂部創立の爲め盡力する所少からず、民間に於ける管絃樂團設立の運動にも功勞を認められ且つ唱歌教科書に初めて伴奏譜を附して本邦唱歌教科書に一新紀元を開いたものである。曩に獨逸國政府より同氏にプロフェツソンの稱號を贈つたが今度の勳五等に叙せられ雙光旭日章を授與せられたのと相俟つて氏は歡喜してゐる

〔國民新聞〕昭和十一年七月二十九日

〔墓碑建設を報ずる新聞記事〕

異境に眠るウ氏へ 報恩の墓碑建設

日本樂壇の大恩人故ハイリツヒ・ウエルクマイステル氏に對する教へ子の美しい報恩の企て、これは日本樂壇人の恩師を慕ふ國際佳話である

樂壇總動員の美舉

二十六日午後七時から淀橋區大久保百人町三の三一二セロ演奏家中島氏邸で松島彝子、平井保三、鈴木二三雄、鈴木總、小澤弘の諸氏が集まり、第一回の實行委員會を開いた、最初は胸像を作つてはといふ意見もあったが在留卅年日本樂壇の事實上の開拓者として一生を捧げたウ氏の英靈を日本に安らかに眠らせるために墓碑を建設する事に決定した、場所は多磨墓地を第一候補地にあげ來月四日中島氏以下實行委員が下檢分に赴くが、用材、碑文等は順次委員會を開いてきめる、この基金は門下生の間で釀金することになつた。

故ウ氏が東京音樂學校教授として明治四十年始めて日本に來朝して以來、教壇に、個人的に手をとつて訓育した人々は作曲界の大御所山田耕柞、近衛秀麿、信時潔、小松耕輔、大塚淳の諸氏等現代日本のセロ演奏家は勿論、作曲界のさうく、所はほとんど全員である。

今春ウ氏の病あつしの報が傳はつた時、樂壇人はあげて同情し見舞金を募集、それがまだ全部集まり切らぬ八月十六日氏は靜かに昇天したのである。

當時集まつた見舞金が約千圓あつた、氏の病床にあつて何くれと面倒を見た松島女史等の間で記念計畫が進められ、山田耕柞氏以下主なる門人十名が實行委員となり具體案を進めてゐたものである、碑は故人の一周忌までに造る豫定である。

〔報知新聞〕昭和十一年九月二十七日

〔乘杉校長の弔辭〕

故ウエルクマイステル先生葬儀

前本校講師、獨逸プロフェツソル勳五等ウエルクマイステル先生の葬儀は去月二十六日午後三時より麴町區中六番町獨逸教會に於て左記の通り執行され、引つゞき告別式が行はれたが乘杉校長の弔辭左の如し。

順 序

一、甲鐘 二、オルガン獨奏 三、開式の辭 四、バリトン獨唱
五、式辭 六、ソプラノ獨唱 七、弔辭 乘杉校長、三室戸子爵、
信時潔氏 八、ソプラノ獨唱 九、主の禱並祝禱 十、甲鐘 十

二、告別式

故ハイリツヒ、ウエルクマイステル氏弔辭

以上

本邦樂壇開拓ノ功勞者ハイリツヒ、ウエルクマイステル氏遂ニ
溢焉トシテ逝ク、嗟々悼マシイ哉、君少壯ニシテ來朝シ、我カ東京
音樂學校ニ職ヲ奉シテ以來歳ヲ累ヌルコト正ニ三十、殆ント其ノ全
生命ヲ我カ國音樂教育ノ爲ニ竭ス、客秋本校定期演奏會開演中突如
病ヲ發シテ褥ニ就キシカ百方加療一時少康ヲ得テ吾レ人共ニ君カ悠
揚タル風丰ニ接スルノ日マタ遠カラサルヘキヲ希ヘリ、爾後君ハ書
ヲ寄セテ具サニ病軀ノ心境ヲ報スルコト屢次、余ハ衷心君カ恢復ヲ
勵マシツツモ豫後ヲ想察シテ轉タ暗涙ヲ催ササルヲ得サリキ、爾來
病勢一進、一退秋風再ヒ都門ヲ訪ツレ、階前ノ樹草露漸ク滋カラ
トスルニ當リ、果然君ノ訃音ニ接ス痛恨ノ情哀惜ノ念新タニ綿々ト
シテ盡クルナシ。

然リト雖モ君カ貽セル功績極メテ顯著ナルハ夙ニ世人ノ認ムル
所、君カ薰陶セル儕々タル多士ハ、今ヤ我カ樂壇ノ上層ニ活躍シツ
ツアリ、況ンヤ最近天聽ヲ忝ウシテ、特ニ叙勳ノ恩命ニ浴シタルオ
ヤ、君以テ瞑スヘキナリ、吾等以テ慰ムヘキナリ、冀クハ英魂長ヘ
ニ吾等ノ前途ヲ照護セヨ。

茲ニ生前君ト縁由最モ深キ東京音樂學校並ニ同聲會を代表シ度ミ
テ弔辭ヲ靈前ニ捧ク、髣髴トシテ來リ饗ケヨ。

昭和十一年八月二十六日

東京音樂學校長正四位勳二等 乘 杉 嘉 壽

〔同聲會會報〕昭和十一年九月 第二二七號 七三〜七四頁

〔追悼文〕

ウエルクマイステル氏の功績

牛 山 充

ウエルクマイステル氏の急逝は容易に充たすことの出来ない間隙
を我樂壇に残した。

氏が初めて來朝したのは明治四十年で、當時まだ二十四五の白面
の美青年であつた。東京音樂學校一覽によると初めて就任授業に取
りかゝつたのは明治四十一年四月で、當時の校長は北海道廳事務官
から轉任して來た湯原元一氏。音樂學校の宿弊を一掃し、非常な抱
負を以つて改革に着手してゐた時で、今の流行語で云ふと校規肅正
の氣が學校内に横溢してゐた。

氏の來朝する迄はチェロの正しい奏法を知るものは無く、皆自己
流でやつてゐたので、我邦に正統的なチェロ奏法を傳へたのは氏を
以つて嚆矢とする。第一に氏に就いて此困難な絃樂器を修めたのは
山田耕柞、信時潔等の人々で、今滿鐵で鳴らしてゐる林顯藏、宮内
省樂部と國立東京高等音樂學院チェロ樂主任の多基永、寶塚の竹内
平吉氏等を出すに及んで、音樂學校の本器樂部中最も振はなかつた
チェロ科が漸く我樂界に重きを成すに至つた。

音樂學校の卒業演奏にゴルターマンの協奏曲などが聽けるやうに
なつたのは全く氏の來朝の賜である。由來本科器樂部でもチェロ科
はオルガン科に亞いで最も振はない科で、ピアノやヴァイオリンで
ハネられた學生の收容所だと、ウエルクマイステル氏が屢々筆者に
愚痴をこぼしたものである。それでも根氣よく自己の専門たるチェ
ロ音樂のために子弟を教へ、高勇吉、伊達三郎二氏のやうなテクニ

シヤンを出し、教師として平井保三氏を出すと云ふやうで、徐々に多年の努力が實を結ぶやうになつた。

氏は又ユンケル、クローン兩氏を助けて音楽學校の管絃樂員の養成に努力し、海軍々樂隊の委託生の指導に當り、海軍々樂隊管絃樂の發達にも少なからぬ寄與をしてゐる。

音楽學校教師として學生を指導する傍ら民間の好樂家にもチェロを教授した。岩崎男爵は氏に此男性的な絃樂器の傳習を受けた最初の生徒の一人である。

氏の來朝當時に於ける我邦の作曲は極めて幼稚のもので、漸く單音の學校唱歌位のものであつた。これに慊らず、藝術的樂曲の創作を志しても、誰一人として指導を與へ得る教師が絶無であつた。山田耕柞氏の如きは斯る作曲志願者の一人であつたから、氏の來朝は正に盲龜の浮木であつた。音楽學校の正科に作曲科は無く、表向き師事することは出来なかつたので、私宅教授を受けて作曲に精進し、異常の才能を示した。

年齢から云ふと山田氏はウエルク氏より僅かに三つ年下で、殆んど友人位であつたが、大に山田氏の才能を愛し、岩崎男に説いて獨逸に留學させ、錦衣歸朝後、更に東京フィルハーモニーの組織に迄進め、遂に後年の日本交響樂團を生み、現在の放送交響樂團たる新交響樂團の素地を作るに至らしめた功は没す可らざるものがある。

若しもウエルク氏の推輓が無く、岩崎男の援助を受けなかつたとしたら、山田耕柞如何に不世出の英才であつたとしても、大正年間を通じて我音楽史上のあのやうな不朽の足跡を印する大飛躍は不可能であつたらう。

氏はまた直接間接に我邦の室内樂演奏の發達に多大の貢獻をしてゐる。ユンケル(第一ヴァイオリン) 安藤幸子(第二) 幸田延子(ヴィオラ)の三氏と屢々絃樂四重奏を、シヨルツ、コハンスキ、シロタ等とピアノ・トリオを演奏し、多久寅(第一) 川上淳(第二) 大塚淳(ヴィオラ) 山田耕柞(チェロ)の多コーテット、窪兼雅(第一) 芝祐孟(第二) 杉山長谷夫(ヴィオラ) 多基永(チェロ)のハイドン・コーテット、ジェームス・ダン、杉山長谷夫、高勇吉のダスコ・トリオ等に範を垂れ、先には音楽獎勵會に、後には東京室内樂の會に重要な出演者として活躍した功績も亦没す可らざるものがある。

樂壇の三面六臂居士伊庭孝氏がウエルク氏のチェロの高弟の一人たる竹内平吉氏に師事してチェロを修め、白眉音楽叢書中に「チェロの弾き方」を書いてゐることなどはあまり知つてゐる人が無いかもしれない。併し此點で我等の一言居士伊庭孝氏はウエルク氏の孫弟子といふことになる。

作曲が我樂界で重要な位置を占めるやうになつたのは全く氏の來朝の賜で、チェロの高足が悉く氏の門下であると同様に、作曲界の逸材も多くは氏の直門、若しくは孫弟子に當り、極めて少數の人々が獨學自習である。

音楽學校當局の發表によると、學校唱歌に伴奏を附すやうになつたのも、氏の獻策によると云はれてゐる。してみると氏の功績は極めて多方面で、其多くは縁の下の力持ち的ではあつたが、それだけに基礎的な堅實性と重要性とを有つてゐる。

氏自身はチェリストで、又チェロの教授を表藝としてゐたが我邦

他に適當なる作曲の教師がなかつたために、作曲法の教授が表藝たるチェロの教授以上に氏の重要な任務であつた觀すらある。従つてチェロ獨奏用の樂曲以外に、ピアノ曲、管絃樂曲、歌曲等の添削もしたので、ドイツ歌曲の造詣も深く、我聲樂家達に解釋上幾多の助言を與へた。日本を愛し、能く日本語をあやつつたので、ペツォールド、レーヴェ、マリア・トル等の諸家がまだ日本學生に馴れない頃は、氏が何くれとなく親切な助力をしてゐたやうで、柳兼子、武岡鶴代、鈴木乃婦子等の諸君は大に氏を徳とし、澤崎定之、梁田貞、矢田部勤吉等の諸君もウェルク先生、ウェルク先生と、氏の名を口にする時には一種敬愛の念を以つてするのを常としてゐた。今溢焉として其訃に接し、氏の功績に對し追憶の情禁じ難きものがある。

〔月刊樂譜〕第二十五卷第九号 昭和十一年九月 一一〇〜一二二頁

〔同誌同号には、この他に鈴木信子、平井保三、松島彝、中島方によるウェルクマイスター氏への追悼文が掲載されている〕

(二) ハンカ・ペツォルト Hanka Petzold

在職期間 明治四十二年〜大正十三年（一九一〇〜一九二六）

備外國人教師

担当科目 ピアノ、唱歌

履歴（要約）

一八六二年ノルウェー南部のクリスチャンサンで生まれ、父親が市長を務めていたベルゲンに移る。子供の頃、シヨパンが得意だった母親からピアノの手ほどきを受け、当時高名なヴァイオリニストだったオーレ・ブ

ル主催の演奏会でデビューを飾る。その後パリでトメ、ドラボルド、ガエルにピアノを学び、さらにヴァイマルに渡つてリストに師事した。また、このころ声樂の道も志すようになり、まずパリに戻りマルケージに、次いでドレスデンでオルゲニに師事し、バイロイトでコジマ・ヴァーグナーからヴァーグナーのオペラを学んだ。コペンハーゲンの王立歌劇場で、ヴァーグナー『タンホイザー』のエリーザベト役でデビューを飾り大成功をおさめ、その後ヨーロッパ各地でピアノ兼オペラ歌手として活躍した。

一九一〇年（明治四十三年）十二月八日¹ヴェルクマイスターからの紹介で、仏教研究家でドイツ人の夫ブルーノ・ペツォルト（第一高等学校教授。なお、ハンカは結婚後ドイツ国籍を取得）とともに来日・着任した。一九一一年（明治四十四年）十一月二十二日ロイテルとともに奏任に準ぜられる。

一九二二年（明治四十五年）一月十五日前年十二月に自宅が全焼したため、東京音楽学校で慈善演奏会が開かれた（三浦環らが出演）。

一九一四年（大正三年）十一月五日高等官五等以上に準ぜられる。

一九一五年（大正四年）七月十日契約時間外に、唱歌授業に関する特別調査を囑託される。

一九二二年（大正十一年）二月二十六日弟子たちにより謝恩大演奏会が東京音楽学校で開かれた。九月三十日シヨルツ退職後の後任決定までの間、臨時に契約時間外の授業担当を命ぜられる。

一九二四年（大正十三年）三月三十一日契約期間が切れたため、退職。在任中には、三浦環、柳兼子、永井郁子、船橋榮吉、矢田部勤吉、關鑑子らを育てた。

退職後も東京で後進の指導にあたり、在任中に引き続き多彩な演奏活動も行った。

一九二七年（昭和二年）五月ベートルヴェン生誕百年祭の功勞者として、ゾルフ独大使より記念品を贈られる。